

幼稚園における問題児とその指導

——問題の母と問題の子——

帖佐 佐和子



幼稚園において問題児とされる子どもの行動は、家庭——とくに母親の子どもに対する態度に起因することが多い。

問題の母親には、①過保護型、②溺愛型、③拒否型、④厳格型、⑤期待型、⑥矛盾型、不一致型などがあるが、ここでは、①、②型の重なっている母親とその子どもとをとりあげて考察してみる。

〔例〕

A子 五才六か月（六月現在）の女児

知能程度 中の下

一、家庭環境

父母、姉三人の六人家族。

父は会社員で元小学校教諭。

母は家庭の主婦で元幼稚園教諭。

姉三人は異腹、A子のみが現母の実子である。

家庭の教育方針は、女らしくすなおな子どもになるように、ということである。

二、母親について

○一般的な特徴

過保護、溺愛、干渉過多。

○具体的行動特徴

①子どもから離れない。

「私がないとこの子は不安なんですよ。」といい、子どもの手を離そうとしな

②子どもを赤ん坊扱いにする。

下園時、門の所で心配そうに待っていたが、子どもの姿をみるなり、「いないないばあ——」と喋って後手にもついていた人形をみせた。そしてA子を背負って帰っていった。

③幼児語をつかう。

子ども自身は全く幼児語をつかっていないのに、「A子ちゃんといっちょにあちよんでちょうだいね」と他の子にまで幼児語で話しかける。

④家庭指導（母親、子どもの話による）

a. 用便は必ずついて行き、パンツのあげおろしから、ふくこと、手を洗うこと

すべて母親がする。

b. クレヨンを与えない。(あちこちに

たずらがきをするという理由で)

c. 食事はそばについていて手助けをする。

d. 厚着をさせる。(身体が弱いからとい

う理由で)

e. テレビを子どもの意向によって夜遅く

までみせることがある。

f. 家庭内でばかり遊ばせる。

⑤ 先生への干渉

「友だちと仲良く遊べるようにして下さ

い」という希望をもっているが、教師の

幼稚園での指導に関して、単なる質問や

感想ではなく、し細な点まで干渉するこ

とがたびたびである。

例 保育室の電燈の点滅について。

— 他の園児についての教師への注意。

三、A子について

○一般的な特徴

神経質、臆病、自立性の欠如。

○具体的行動特徴(入園当時)

① 母親から離れない。

b. 自分からは何もしない。

自分の持物を他の子のように、教えられた自分の場所へ自分で処置しようとし

ない。(クレヨン、ハサミ、かばん、帽

子など)

c. 用便はかならず母親にさせてもらう。

② 友だちとあそぼうとしない。

あそびの仲間に入ろうとしない。

③ a. 絵は一色で線画をかく。人物画は四

才児なみである。(赤あるいはバラ色を

好む)

b. 色白で平素はトロンとした目つきをし

無気力であるが、何かに驚くと、「キャ

ー」という声を発し顔をしかめたり耳を

押さえたりする。泣き顔(表情↓涙)、

笑い顔は意識した表情をつくる。

c. 発音は正常だが、質問には一語文で答

える。

④ 泣きわめく。

身体検査のとき、「しない」「いや」と

拝見しました。

A子ちゃんと、そのお母さんの記録を

これは一つの解釈ですが、次のような一つの過程がこの記録から浮かびあってきました。

このお母さんは、自分から生まれなかつた三人の子どもを育てていられるよう

です。何でもなく育てられているときには、

は、気にしなくてすむことなのですが、

やはり日々の生活の中で、遠慮とか何とか母としてはもの足りないものを感じる

ことなどがあると、その積もった気持ちを

自分から生まれたA子に期待しがちなのではないかと思われまます。その結果とし

て、過保護、干渉過多、溺愛という現象

をもたらしただけでしょう。

一方、子どもは本来、自らもとめて自

分の力をふりしぼって訓練を望み、独立

してゆこうとするのですが、このような

お母さんのものでは、その気持をじゅう

ぶんにも生かすことが出来ません。しよう

と思う前に、先まわりして出来てしま

泣きわめいたが、無理に医師のところへつれていくと泣きやんで口の両わきに指をはさみ白眼を出して「ウォー」とライオンのまねをした。

(母親がみたA子の性質はうちべんけい、気が小さい、わりにまげぎらい。)

四、幼稚園での指導

① a. 母親から三日目に離し、母の役を教師がし、できるだけA子と一しょに行動した。母親には部屋の中、廊下、外庭、門の所と次第に遠い場所へと依頼した。

最初母親の姿がみえると泣いたが、すぐなれて幼稚園が好きになった。

b. 自分のことは自分でするようにかばんや帽子をかける場所を「先生に教えてくださいな」とその場所を案内させ、ほんやりしているA子に「さあ、かけましようね」と誘導する。

c. 用便のとき手はずけを少しずつ減らし自分ひとりでもできるという経験と自信をもたせた。

② a. 教師だけに添わないよう、よく世話をやくK子、明朗でやさしく比較的A子の家に近いO子、身体は小さく静かで活動はA子と同程度に鈍いがしっかりしているR子といずれも女児三人をえらんで友だちとした。

b. はじめは椅子にばんやり座っていることが多かったので絵本を読んでやったり話しかけてその子を知るようつとめた。

仲良しの友だちに手をひかれていいる状態から次第に大きいグループのあそびにも入れるよう興味を誘い、今ではおにごっこやその他の活発なあそびにも仲間入りできるくらいになった。

c. 自分の身の仕末ができるようになってきたのと平行に「これをS先生にあげてきてね」と少しずつ仕事を与え、できたときにはS先生にもほめてもらい、他人の為の仕事にも喜びをもたせるようにした。

③ a. はじめて絵をかくとき「かけない」といってクレヨンをもたなかったが

い、やりたいと思うとおとなの都合で禁じられるのでは、思う存分自分の力をためして、自分が出ることが何であるかを認める機会がないわけです。そうなる子どもは自分の代りに考えたり判断したり実行したりしてくれる母親に依存せざるを得ず、自分で新しいことに立ち向かう勇気を失ってしまいます。

そこで母親にとってはおとなしい素直な子どもとなり、他人には臆病で自立心が欠け、頼りなく、要求はすべて泣声で表現して他人に判断させるような困った子どもとなるのでしょう。

こんな場合、子どもの指導としては帖佐先生がなさったように、子どもの自信をとり返すことがやはり大切でしょう。

自分で何が出来るか知ったとき、そんなにお母さんが必要としなくなるでしょうし、お友だちや先生とも落ちついて遊ぶことが出来るようになるでしょう。

しかし、やはり、帖佐先生もおっしゃるように、さらに解決しなければならな

「クレヨンをこうもって、ほら、こんなきれいな色がつくわ、A子ちゃんも先生にかけてみせて」というと赤をもって画用紙によわよわしくそっと線をかいた。今だに線画ではあるが描くことに抵抗はない。

b. 泣き顔をつくって泣くこともなくなくなり、いきいきとした子どもらしい平穏な顔つきになってきた。

c. 一語文から「ここR子ちゃんの座るところ」といった多語文をつかいはじめた。
b. 歌やリズムあそびのときも動かなかつたが容易なものでたびたび見聞きするのは口をはつきり開き、スキップはできないがリズムにも喜んでのっているの、A子を見守りほほえみかけると、にっこり笑いかえすようになった。

④ツベルクリンの注射を接種するとき、他の幼児たちは教師から事前に話された「おまめの注射」に興味をもち喜んでうけたが、A子だけは泣き続けた。注射が案外あつけなかつた為「もういいの？」と

ききかえし、「先生のいった通りだった？」とたずねたら「うん」。これ以後事前泣きわめかなくなった。

五、むずび

以上のように幼稚園での指導によってかなり問題行動は矯正されてきてはいるが、さらに解決しなければならぬ問題が数多く残されている。

これらの問題の困難な原因の一つには、母親が元幼稚園教諭（戦前）であり、しかも自分の子どもを育てているというのを極度に自負している為、自信過多に陥っている。したがって教師を信頼するよりも指導しようとする態度が強く、教育理論と実際教育実施とが全く食い違っている為間違つた方へむいていることに気づいていないことなどにある。子どもの教育はあくまでも教師と母親との協力が必要であると信ずるので、今後この母親とさらに深く話し合い、解決の道を見出したい。（東京・西桜幼稚園）

い問題は残っているようです。

A子ちゃんの問題行動は多分に日々接しているお母さんの気持が原因しているようですから、お母さんの気持が解決しないとじゅうぶんではないでしょう。

何故にお母さんはA子ちゃんに対してこのような行為をするのか、しなければならぬかを考えるとき、A子ちゃんをはなれて話し合うことがお母さんにとって役立つのではないかと思われます。元先生だったというこのお母さんと話すことに、先生はずい分抵抗を感じていられたようですが、それは子どもの扱い方の個々について指導しようとしたからではないでしょうか。お母さんの気持がほぐれたとき、個々のやり方は自然により良い方向に修正されるでしょう。

つけ加えて、記録の中に、母親にも子どもにも良い面が読みとれるように書いていただけたら、さらに有効だったと思えました。

（お茶の水女子大学 荒屋良子）